

豊後における磨崖クルスについて

はじめに

佐藤 満洋

豊後国はわが国における代表的な磨崖石仏があることで有名であり、美術的価値の高いものが多い。この磨崖仏造願の基礎的条件として、仏教の伝道布教による豊後の人々の深い信仰心のあらわれがあげられるが、この深い信仰心という基礎に加えて豊後には比較的容易に彫刻し得る阿蘇溶岩や凝灰岩の岩壁が多いため、これが優れた仏教美術を生み出す土壌となっていることは周知の通りである。

ところで、この豊後に天文二〇年（一五五一）にフランシスコ・ザビエルによって新しい宗教であるキリスト教が伝えられた。磨崖クルスが彫刻された。キリスト教に帰依した人々は、優れた仏教美術を生み出した同じ土地（豊後）に育った人々であった。このため、仏教信仰が磨崖石仏を造願させたと同様にキリスト教信仰が磨崖クルスを彫刻させたものであろうと考えられる。

磨崖クルスの代表的なものとして大野郡野津町寺小路の磨崖クルスがあげられる。しかしキリスト教はやがて禁教となり信徒への弾圧がきびしくなるにつれて、信徒はかくれクリシタンとなつて探索の目に怯えることになつたが、逆に信仰心は強くなりひそかに磨崖クルスを刻んで信仰を続けたと考えられる。

禁教時代にはいつてからのものは磨崖クルスと呼ぶには、磨崖石仏のイメージからすればあまりにも小規模ではあるが、信仰の象徴として磨崖クルスが刻まれたものがある。

今日まで筆者が調査し得た禁教時代のものには大野郡三重町宇対瀬の薬研彫りクルスと、直入郡直入町栃原のC字クルスをあげる事ができる。

以下豊後における磨崖クルスについて述べてみよう。

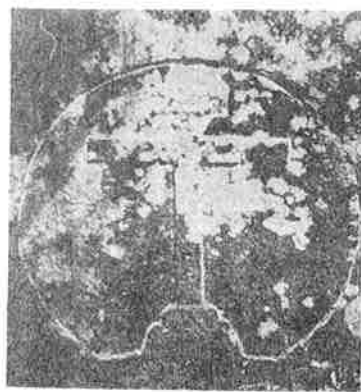
一、寺小路の磨崖クルス

大野郡野津町寺小路にキリスト教の栄えた昔をしのばせる磨崖クルスがみられる。地図上にその位置を求めれば、国道一〇号線沿いに野津町の中心地野津市があるが、野津市の西方約三百米の位置(国道一〇号線沿)に寺小路がある。

磨崖クルスは寺小路の村はずれの小路と呼ばれる処にあり、平山茂樹氏所有地内の崖下の岩に刻まれている。(現在農機具店の裏手になっている。)

磨崖クルスの刻まれている岩の大きさは、正面の高さ一米三〇厘、横二米六〇厘、奥行き約一米(最大巾)であるが、正面の右寄りに直径六二厘の円を深さ約〇・五厘の線でえがき、その中心部に浮彫りで台付の千十字架が彫ってある。台は外側の円の下端をかくすようにして円の中に突き出し、その上に千十字架が建っている。

千十字架の上部はやや破損しているが、その計測値を示すと、高さ四二厘、上段横棒の長さ一二・五厘(左端破損)、下段横棒の長さ三五厘、上下段の間隔が四・五厘、十字架の巾五厘、厚さ〇・五厘で円の内部に浮彫りになっている。台は二段で、下段底辺の巾一九厘、外側の円の下端を隠した部分は台の左右八厘づつ、下段の高さ七厘、上段の巾八厘高さ五厘(上下段とも角を丸くしてある)となっている。



(大野郡野津町寺小路の磨崖クルス)

仏教における磨崖仏に比べればきわめて質素な彫刻ではあるが、これは時代や宗教の違いからくるものである。

誰がいつ頃彫刻したものかについては、記録もないし、伝承も残っていないがこれだけ立派な十字架を彫刻していることは、この地方にキリスト教が栄えていた時代のものであることには間違いないであろう。

この磨崖クルスや野津地方のキリシタンについてはすでに多くの先学によつて紹介されているが、右の磨崖クルスが彫刻された歴史的背景について述べてみよう。

天文二〇年（一五五一）に豊後に伝えられたキリスト教は、領主大友宗麟の保護のもとに豊後各地に広まっていったが、野津地方もその一つで、天正八年（一五八〇）にはキリスト教信者の数は三千五百人にも達し教会堂もできていたようである。

さらに天正一三年（一五八五）の記録では同地方に一四・五の十字架があったという。同地方の黒坂や波津久、椎原などにクルス場と呼ばれる地名が残っているが、あるいはこのような地名が残っている処に十字架が建てられていたのかも考えられる。

竹村寛氏や故半田康夫氏は寺小路の磨崖クルスは一四・五の十字架の一つであろうとされており、さらに竹村氏は磨崖クルスの南側の到明寺跡はかつての教会堂の跡ではないかともみておられる。

これらの推測を積極的に裏づける史料はないが、ともあれ、野津地方には禁教以前にかなりキリスト教が栄えていたことは事実である。そしてこれが寺小路の磨崖クルス彫刻の背景となつたのであろう。

ところが天正一五年（一五八七）の秀吉による第一回の禁教令が出されると、その翌年の天正一六年（一五八八）に野津地方の有力な信者「常珠」が、領主大友義統の命により暗殺されている。その後キリスト教は次第に斜陽化の傾向をたどるようになり徳川時代も寛永以後になるとキリシタンへの弾圧が急速に強化されるようになり、十字架の多くは隠されたり破壊されたであろうことが想像できるのである。

このような状況下であつて寺小路の磨崖クルスだけは人目にふれることなく昔日の姿を今日に伝えているのである。

二、宇対瀬の薬研刻りクルス

大野郡三重町大字浅瀬宇対瀬の大野川北岸の山中に切り立つ岩壁があり、その岩壁に二個の薬研彫りクルスがみられる。地図上にその位置を求めれば、豊肥線三重駅からほぼ東方の犬飼駅方面に向けて鉄道や県道に沿い約六・五キロの位置に大字浅瀬宇対瀬がある。

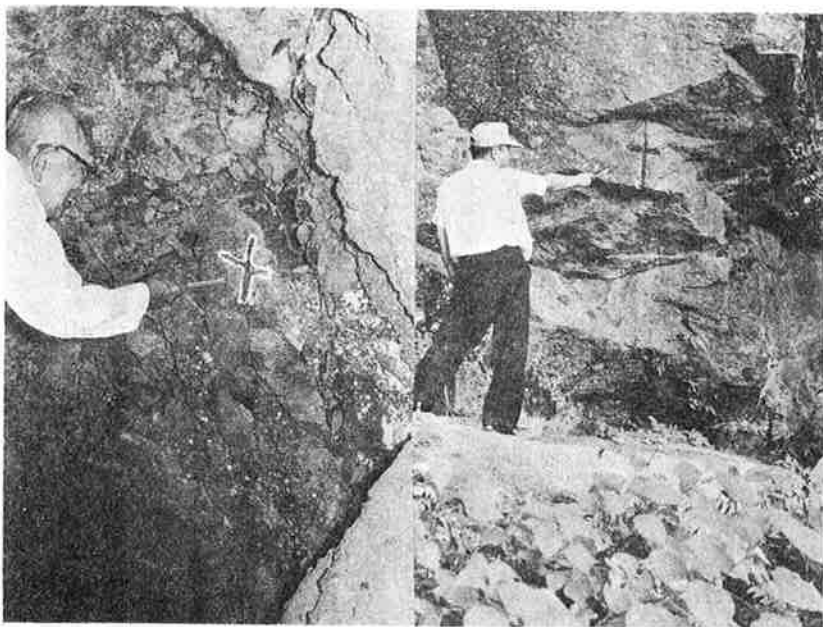
十字架の刻まれている岩壁は宇対瀬の県道から約四百米西方の山中にあり、三重史談会の手でここに通ずる細道が開かれて^⑦いる。その細道は古くは途中で懸崖を降りると大野川を渡って千歳村柴山方面（旧井田郷）に通ずる小路であったが、懸崖を降りた処からその細道に分かれて崖下を西に約五〇米進むと十字架の刻まれた岩壁の下に達する。

十字架の大きさは前者が縦棒の長さ四〇糎、十字部の上一八糎、同下二二糎、横棒の長さ二〇糎（左右一〇糎ずつ）彫り刻まれており、縦棒の長さ二〇糎、十字部の上九糎、同下一一糎、横棒一六糎（左右八糎ずつ）、刻りの深さ平均四糎（中心部六糎）、巾二糎であるが、後者の方は岩の質も悪く風化がひどい。この二個の薬研彫り十字架は先項の寺小路磨崖クルスに比べるときわめてお粗末な十字架である。

またこの十字架は誰が刻んだのか、いつ頃のものかなどについての伝承はない。しかしこの二個の十字は単なるいたずらや、山の境界を示す標識ではなく、かくれキリシタンの手によってひそかに刻まれた信仰の象徴としての十字架であると考えられるのである。

そこでこの十字架を刻ませた歴史的背景について考察してみよう。

永禄二年（一五六九）の記録^⑧によってみると、大野郡井田郷及び三重郷（現千歳村・三重町）の信者は一六〇人に達したが、イルマン・ギリエメルが一〇箇月間にわたって同地方に滞在し、熱心に布教した結果信者の数は二百人に増加している。



大野郡三重町宇対瀬の薬研刻リクルス

- (右) 西側の大きいクルス。庇様の岩に刻まれている。
- (左) 東側の小さいクルス、小洞穴入口上に刻まれているが風化がひどく注意しなければわからない。

さらに同地方の領主は事情があつて帰依はしなかつたが、彼自身もキリシタンたらんことを欲したようで、パードレ・フィゲイレドに対して教会堂建設のための敷地や材木の寄進を申し出たほどであつた（教会堂建築は行なわれなかつたが）。

このようなわけで同地方に熱心なキリシタンが多数いたことは事実であるし、彼らの燈した信仰の燈火は禁教時代にはいつてからもかくれキリシタンとなつてもえ続けている。

即ち、寛文二年（一五六三）に川辺村（三重町）の作右衛門夫婦がキリシタンであることが發覺して長崎に送られたのをはじめ、同八年（一五六九）には山中村（三重町）の久蔵の女房もキリシタンであることが發覺して長崎に送られたり、またキリシタンの病死者として記録に残っている者に元禄一四（一七〇一）に市場村の平左衛門、享保一三（一七二八）に切支丹本人堅知の妻などがみられることはこれを証明するものであるし、さらに三重町の赤嶺墓地や、竜仏寺墓地、伏野の中野墓地、深野墓地^⑫、千歳村の高添墓地などに多数のかくれキリシタン墓があることもこれを証明するものであらう。

このような歴史的事実の存する三重地方に磨崖クルスが刻まれていても不思議ではないし、その刻まれている位置的にも三重・井田郷境の大野川南側の山中であり、両郷を結ぶ細道がその近くを通つており、同地方のかくれキリシタンがひそかに聖域とするにはかつこうの場所である。

岩陰にくつきりと浮かぶ薬研彫りの十字架がこのことを物語っているようである。

さらにこの岩場には「カワラモンが来るので近寄つてはならない」という伝承があり人々を近づけないようにしていたのもここがかくれキリシタンの聖域であつたことを裏付けるものではないだらうか。

三、栃原のC字クルス^⑬

所在地は直入郡直入町栃原であるが、このC字クルスには伝承があるので伝承を紹介し、はたしてC字クルスであるかいかについて検討してみたい。

直入郡直入町長湯地方と久住町都野地方は古くは朽網郷と呼ばれていたが、同郷の中世のことを伝える記録に『朽網記』や『朽網古伝記』があり、その中に「馬鬼之事聞書」と題する物語りがある。

この「馬鬼之事聞書」はキリシタンとは関係がないが、その異説がキリシタンに関係がありそうなので、まず順序として「馬鬼之事聞書」からかいつまんで紹介してみよう。

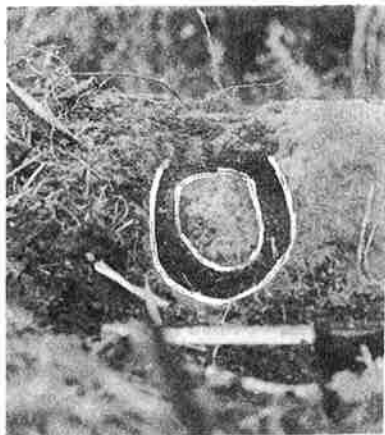
「毎年一〇月一五日は朽網郷の嵯峨宮大明神の祭礼で、この日には同郷の領主朽網氏から神馬が嵯峨宮大明神に奉納されることになっていた。そして祭日の翌一六日にはその神馬を黒岳山麓に放つて、翌年の祭礼まで野馬としておく習わしになっていた。

ところが天正一二年（一五八四）にこの神馬が馬鬼となつて現われ、人々に害を加え始めたので朽網氏は家臣の城香因幡守と大窪藏人に命じてこの馬鬼を退治させた。そして馬鬼の首は領主朽網宗曆の隠宅の近くに埋めた」という話の聞きである。

ところが同じ朽網郷でありながら長湯地方には「その馬鬼は手負いとなつて祖母山にのがれた」という異説が伝承されている。そして祖母山にのがれる時栃原（直入町）を通つたといい、同部落南側山腹の道路端の岩に馬鬼の足跡と伝えらる馬の足跡様のものが残っている。

この足跡様のものの直径は九糎であるが、これは決して馬の足跡ではなく人工のものであることは明らかである。

どうしてこの地方の人々は馬鬼異説をつくり、足跡まで岩に刻むという手数のかかることをしたのだろうか。「ものずきな人々だ」と笑ってしまへばそれまでであるが、笑えない理由が馬鬼異説を伴った足跡にあるように思えるので



上からみた馬鬼の足あと



C字の刻まれたトマス型伏墓

ある。

というのは栃原部落の古庄家墓地にはトマス型伏墓の上に馬鬼の足跡と同じ形のもの、即ちC字が刻まれたものがある。馬鬼はこの墓石の上にも足跡を残したのだろうか。しかし、その大きさは直径六糎で先の馬鬼の足跡より三糎も小さいのでこれは別であろう。

キリシタン墓のうち最も数の多いトマス型伏墓や薄型伏墓の中には、十字を刻んだものや上面の対角と結んでアンドレア十字を彫ったもの、あるいは十字に代わるものとして○印を刻んだもの等々があるが、⁽¹⁴⁾墓石が同じトマス型伏墓であるのでこのC字も或はそのようなものではないだろうか。

ここで朽網郷とキリスト教の関係はどのようにあったのかについて述べておきたい。

朽網地方は豊後では府内に次いでいち早くキリシタンが生まれた地方であり、⁽¹⁵⁾天文二三年（一五五四）には熱心な信者ルカス（教名）以下その家族を含めて三百人の信者ができている。さらに領主朽網氏の保護奨励で信者は増加し、永祿四年（一五六二）には先のルカスが自費で豊後国における最初の教会堂⁽¹⁶⁾を建てるとして、朽網地方はわが国におけるキリスト教布教当初においては府内、平戸、博多、鹿児島、山口、京都、堺などとともに八布教地の一に数えられるほどキリスト教は布教したのである。バルタザール・カーゴやアントニオ、ファン・フェルナンデス等々の来訪が相次ぎ、キリスト教の信仰はますます深まったようである。

直入町下河原の「I N R I」の欧字を刻んだT字墓⁽¹⁷⁾は、このようにキリスト教が同地方に栄えた時代を象徴するものである。

しかし禁教時代になると同地方のキリシタンも影をひそめざるを得なくなった。朽網地方の各地の墓地には多数のかくれキ

リシタン墓がみられ、さらに「類族帳」¹⁸には多数の人々がリストアップされており、宗門改の時には類族なるが由に血判をさせられた者もみられることはかくれキリシタンがかなりいたことを物語るものであろう。

ところで先の馬鬼の足跡と称されるものが残っている栃原部落についてみると、多数のかくれキリシタン墓がみられるし、寛政元年（一七九二）の同地方の「宗門御改帳」¹⁹には「類族ニ付血判仕候」と註書きされて血判をさせられた者もみられる。これはとりもおおさず、かつてキリスト教の栄えた頃の信者にゆかりのある者がいたことを示すものであろう。そしてそれらの中の一人の墓石の上にC字が刻まれたのではないだろうか。C字の刻まれた墓石の正面には「延享三寅年九月七日 釈尼妙蓮」、左側面には「年廿九、弁左衛門母 志津」と書かれており、上面にC字が刻まれているのである。

筆者のキリシタン暮石についての若干の研究によると、禁教時代になり弾圧がだんだんきびしさを増すと、当初は墓石に十字を刻んでいたものがやがて上面の対角を線または浮彫り、或は綾線で結ぶドレア十字に変わり、さらにその中心の十字部に四角や丸の穴をあけて十字を隠したり、墓石そのものに土をかぶせて隠したりするようになっていく。そして十字に代わる信仰を象徴するものとして丸が使われたりするようにになっているが、C字を刻んだものも実は十字に代わる意図があったと考えられるのである。即ち「CRUXまたはCRUZIIクルス」の頭文字のCであろうと筆者は考えている。もちろん延享三年（一七四六）頃、草深い田舎の人々がたとへかくれキリシタンであったとしてもCRUXまたはCRUZなどの文字を知っていたとは考えないが、例へば、「Cのようなしるしはキリスト様をあらわすしるしである」とでも伝承していたとしたならば、文字としてではなく記号式にC字を知っていたことが考えられる。

このように考えると、先述の馬鬼の足跡と称されるのもC字によく似ているのである。それで単にものずきが馬鬼異説を作ったその足跡を彫ったのではなく、実はこの地方に住んでいたかくれキリシタンがひそかに礼拝するために、C字を山腹の道路わきの岩に刻んだのではないかと考えられたのである。

礼拝のための、信仰の象徴としての十字を刻んだ磨崖クルスについてはすでに述べた。

かつてキリスト教が栄え、多数のキリシタンを生み出した朽網にこの種のものがあっても決して不自然ではない。

しかしかくれキリシタンの取縮がきびしくなったため十字架に代わるC字を同意途のもとに刻むことを考えたのであろう。さいわいにC字は馬の足跡に似ているところから、馬鬼異説を創作してカムフラージュしたのではないだろうか。

馬鬼異説が伝承されている地域は栃原をはじめその周辺の部落だけであるのもこのことを裏づけているし、またもし天正二年（一五八四）の馬鬼事件に近い中世末期に馬鬼異説が生まれていたものならば、『朽網記』や『朽網古伝記』などに書かれているはずであるが書かれておらず、しかも伝承されている地域が限定されていることは、この異説がはるかに新しく、江戸時代になってかくれキリシタンの取縮りが一段ときびしさを増してからの作であることを物語っているように考えられるのである。

むすび

以上、豊後にみられる磨崖クルス三例について紹介し、若干の検討を加えてきたが、三例とも偶然にも磨崖石仏に近接してみられるのが注目される。

即ち、寺小路の磨崖クルスの近くには、犬飼町田原の石仏がみられるし、宇対瀬の磨崖クルスの近くには菅尾石仏がみられる。前者の距離はやや離れて約六キロ前後あるが、後者の距離はわずかに四百米しか離れていないのである。また栃原のC字クルスの近くには長湯の線彫磨崖仏（直入町馬門）がみられ、その距離は約三・五キロ前後である。

これは単なる偶然のごとく考えられるが、先にもふれたように豊後には阿蘇溶岩や凝灰岩の岩壁が多く、信仰を象徴するためにこれらの岩壁に彫刻することはすでに豊後の先人達によって磨崖仏造頭ということによって示されていたのである。

そしてその発想は新しい宗教であるキリスト教に帰依した人々にも受け継がれ、磨崖クルスの彫刻となったのであろう。

このため自然条件の備わった岩壁が選ばれた結果、磨崖石仏と磨崖クルスが同一地域に存在する結果となったのであろう。

しかし、キリスト教は禁教、弾圧という歴史的運命のために信者はかくれキリシタンにならざるを得なかったがゆえに、磨

崖石仏とは比ぶべくもない質素な薬研彫りの十字架やC字クルスにならざるを得なかったと考えられるのである。(四四・八一)

(註)

- ① ごく近い例をあげれば竹村寛氏著『キリシタン遺物の研究』、半田康夫氏著『豊後キリシタン遺跡』、北村清士氏著『大分県の切支丹史料』などがある。
- ② 村上直次郎訳『耶穌会士日本通信』(豊後編下巻)
- ③ 『耶穌会の日本年報』第二輯。
- ④ 竹村・半田両氏前掲書
- ⑤ 竹村氏前掲書
- ⑥ 半田氏前掲書
- ⑦ 三重史談会の手で県道からの入口に標識が建てられている。
- ⑧ 昭和四年七月二日の三重史談会の例会に招かれ調査する機会に恵まれた。同史談会に謝意を表したい。なお同十字架は三重史談会員高野俊治氏が今年の一月初見し、その後同史談会有志が調査した際二個めの小十字架を発見した由である。
- ⑨ 村上直次郎訳『耶穌会日本通信』(豊後編下巻)
- ⑩ マリオ・マレガ編『統豊後切支丹史料』
- ⑪ 昭和四二年三重史談会の例会に招かれて調査する機会に恵まれた。
- ⑫ 昭和四年七月の三重史談会例会の時先の十字架とともに調査する機会に恵まれた。
- ⑬ 本稿は昭和四年一月二五日付「大分合同新聞」文化欄に「馬鬼異説・その足跡」と提して発表した拙稿に加筆したものである。
- ⑭ 拙稿「円盤型の墓石補説」(『直入古談』5)
- ⑮ 村上直次郎訳『耶穌会士日本通信』(豊後編上巻。)
- ⑯ 北村清士氏は著書『大分県の切支丹史料』で、「朽網に教会堂を建立したのは山野城主朽網宗策としているが、ルカスと宗策は別人物であり、教会堂建立はルカスである。
- ⑰ 県指定文化財「史跡」(昭和二四年指定)
- ⑱ 武藤大六氏文書(直入郡久住町)
- ⑲ 戸伏家所蔵文書(直入郡直入町)
- ⑳ 「キリシタン墓石の研究」については近く別稿で検討すべく準備中である。